

# 長崎県感染症発生動向調査速報

平成26年第21週 平成26年5月19日（月）～平成26年5月25日（日）

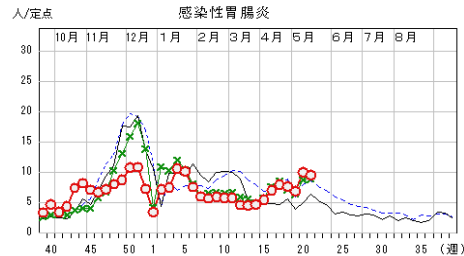
## ☆定点報告疾患（定点当たり報告数の上位3疾患）の発生状況

### (1) 感染性胃腸炎

第21週の報告数は419人で、前週より21人少なく、定点当たりの報告数は9.52であった。

年齢別では、1歳（63人）、4歳（54人）、2歳（53人）の順に多かった。

保健所別の定点当たり報告数は、上五島保健所（15.50）、西彼保健所（15.25）、県北保健所（14.00）が多かった。

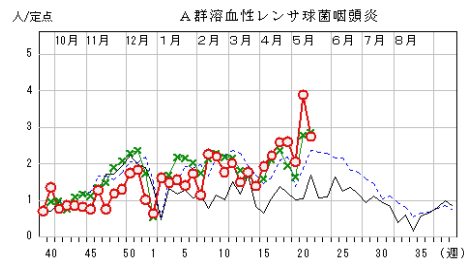


### (2) A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

第21週の報告数は121人で、前週より50人少なく、定点当たりの報告数は2.75であった。

年齢別では、4歳（19人）、5歳（18人）、7歳（14人）の順に多かった。

保健所別の定点当たり報告数は、対馬保健所（9.00）、県央保健所（8.00）、西彼保健所（2.75）が多かった。

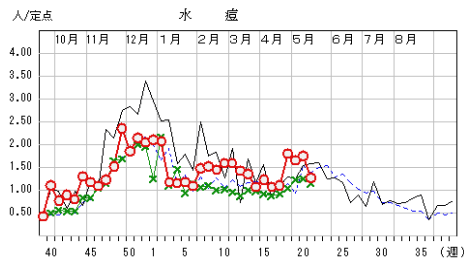


### (3) 水痘

第21週の報告数は56人で、前週より21人少なく、定点当たりの報告数は1.27であった。

年齢別では、1歳（14人）、3歳（14人）、2歳（7人）の順に多かった。

保健所別の定点当たり報告数は、対馬保健所（4.00）、佐世保市保健所（2.33）、長崎市保健所（1.50）が多かった。



○ 当年(長崎県)      — 前年(長崎県)  
× 当年(全国)      - - 前年(全国)

## ☆トピックス・季節情報

### 【感染性胃腸炎】

第21週の感染性胃腸炎の報告数は前週より21人減少して419人となり、定点当たりの人数は9.52でした。県下全域の地区で報告があがっています。先週より警報レベルであった上五島地区は15.50と報告数は減少しましたがまだ警報レベルは解除されていませんので今後の動向に注視し、手洗いの励行を心掛けましょう。

感染性胃腸炎は、細菌又はウイルスなどの病原微生物による嘔吐、下痢を主症状とする感染症です。年齢別に見ると、報告の多くを乳幼児が占めています。原因はノロウイルスをはじめとするカリシウイルスやロタウイルス、エンテロウイルス、アデノウイルスなどのウイルス感染による場合が主流ですが、腸管出血性大腸菌などの細菌が原因となる場合もあります。

原因微生物のうち、ロタウイルスについてはすでにワクチンが認可されていますので、予防することが出来るウイルスです。特に、小さいお子さんがいらっしゃるご家庭では、保護者の方が手洗いの励行、体調管理や体調の変化に心掛けてあげるなどして感染防止に努め、早目に医療機関を受診させてあげるようにしましょう。

### 【A群溶血性レンサ球菌咽頭炎】

長崎県における第21週の報告数は、先週より50人減少して121人となり、定点当たりの人数は2.75でした。上五島地区を除くすべての地区で報告があがっています。対馬地区9.00、県央地区8.00は報告数が警報レベル「8」を超えており、今後の動向に注視していく必要があります。

本感染症の好発年齢は5～15歳で、鼻汁・唾液中のA群溶血性レンサ球菌の飛沫などによってヒトからヒトへ感染します。また、食品を介しての経口感染もあります。潜伏期間は約1～4日で、突然の発熱（高熱）、咽頭痛、全身倦怠感、時に皮疹もあります。急性期患者の感染力は強いですが、適切な抗菌薬の投与により多くは1～2日後には症状も消失し、感染力も著しく低下します。不十分な治療は無症状保菌者を生じやすいため、早期に医療機関を受診するとともに、手洗いやうがい励行し、感染防止に努めましょう。

【水痘】

長崎県における第21週の報告数は、前週より21人減少して56人となり、定点当たりの人数は1.27でした。壱岐地区を除くすべての地区で報告があがっています。対馬地区4.00は他の地区に比べると報告数が多いので今後の動向に注視していく必要があります。

水痘は水疱瘡（みずぼうそう）とも呼ばれ、原因となる水痘帯状疱疹ウイルスは伝播力が強く、ウイルスを含む飛沫あるいは飛沫核を経気道的に吸入することによる飛沫感染、あるいは水泡の内溶液と触れることによる接触感染により感染が成立します。手洗いの励行、体調管理に心がけ感染防止に努めましょう。

**☆トピックス：マダニ類やツツガムシ類の活動が活発な時期になりました。**

マダニ類やツツガムシ類は、野外の藪や草むらに生息しているダニで、食品等に発生するコナダニや衣類、寝具に発生するヒョウダニなど、家庭内に生息するダニとは全く種類が異なります。野生動物が出没する環境に多く生息しているほか、民家の裏山、裏庭、畑やあぜ道などにも生息しています。

マダニ類は、日本紅斑熱や重症熱性血小板減少症候群（SFTS）などを媒介し、ツツガムシ類はその名のとおりつつが虫病を媒介するダニです。

春から秋（3～11月）にかけては、マダニ等の活動が活発になる時期ですので、野外で活動する際は、長袖、長ズボン、長靴を着用するなどして肌の露出を極力避けて感染防止に心がけましょう。もし、マダニ等に咬まれていたことに気づいた場合、無理に取り除こうとすると、マダニの口器が皮膚の中に残り化膿することがありますので、自分で無理に取ろうとせず、皮膚科等の医療機関で適切に処置してもらいましょう。また、咬まれた後に発熱等の症状があった場合は、速やかに医療機関を受診しましょう。受診した医療機関では、咬まれた状況などをできるだけ詳細に説明しましょう。



ヤマアラシチマダニ



フタゲチマダニ



アカツツガムシ

（参考）長崎県医療政策課 予防啓発リーフレット「ダニからうつる病気の予防」

<http://www.pref.nagasaki.jp/shared/uploads/2013/06/1372319143.pdf>

（参考）国立感染症研究所 昆虫医科学部ホームページ「マダニ対策、今できること」

<http://www.nih.go.jp/niid/ja/sfts/2287-ent/3964-madanitaisaku.html>

